

# C—30 和裁に於ける採寸方法についての一考察 (第1報)

東京家政大家政 高月智志子

1. 従来、和服は丈、幅共に余裕をもたせて作られているため、多少の加減は、着付けにより調節出来る便利さから、個人に適した寸法をといわれながらも、標準寸法を基に加減して作られているのが実態のようである。これは、その採寸方法が明確でなかったためと思われる。そこで採寸に当り、どこを拠点に採寸したならば最も合理的であり、且つ採寸しやすいのか、その拠点を見出したいと思う。今回は大裁女物長着の衿下採寸について、その拠点となるべき位置を求めた。

2. 本学学生 1・2 年生 3045 名の身長と坐高について調査し、その内 420 名の腸稜点、臍点、腸稜点から頸付根点、腸稜点から細腰、外果点の位置を測定し、体型の実態を調査。更に細腰、腸稜点より約 2 cm 上、腸稜点より約 2 cm 下の 3 カ所に腰紐を締め、最も楽で締め心地のよい位置をアンケートにより調査。着物の裾線は、床上市の異なる 5 枚の写真観察によるアンケートで、その美しい位置を求めた。

3. 結果は、腸稜点から頸付根点までの長さは、個人差が最も少ない。従って着装時のポイントは、腸稜点であることが判明した。故に衿下採寸は、腸稜点を拠点に採寸し、算出することが、最も妥当であると考えられる。